

たな商品開発に向けた「研修生」という名目で、島外からの移住者の受け入れにも積極的だ。

■町長から職員まで給料カット

だが財政事情は決して楽ではない。借金の返済が増える一方で、04年には地方交付税が大幅に減らされた。当時の町のシミュレーションでは、「08年度には財政再建団体になる」と予想された。そこで山内町長は04年、自分の報酬を30%削減した。削減幅はのちに50%まで広げる。助役(現副町長)、教育長、町議のほか職員もカットに応じた。05年度の職員の給与削減率は平均22%に及び、ラスパインズ指数は72.4で全国最低になった。人件費の削減効果は2億円で、ここからひねり出した資金の一部を子育て支援の資金に充てている。

❖ フローレンス ❖
病児保育で独自スタイル確立

仕事に行こうと思ったら、子供が発熱。しかし、仕事は休めないし、子供を預ける親も近くにいない。こんなときに支えてくれるのが、病児保育を手がけるNPO法人のフローレンス(東京・新宿)だ。子育て支援大賞には第1回から3年連続の応募。今回の審査では先進性や独自の運営スタイルを確立したことが高く評価された。

■「何のため働く？」きっかけに

代表理事の駒崎弘樹氏は学生時代に仲間と情報技術(IT)ベンチャーを立ち上げた。しかし、経営していくうちに「何のために働くのかわからなくなった。人のため、社会のためになりたいと思った」(駒崎氏)という。そこで、この会社は共同経営者に譲って、大学卒業後、いったんフリーターになり、フローレンスを立ち上げた。

病児保育とは、熱を出すなど病気になった子供を預かって保育するサービスのこと。共働き世帯が子育てと仕事を両立させようとするときに一番大変だと感じていることが「病児保育」だという。フローレンスは「病児保育を当たり前の社会的インフラに」という理念を掲げている。

■「共済型」「非施設型」特徴に

病児保育には主に施設型(医療機関併設型、保

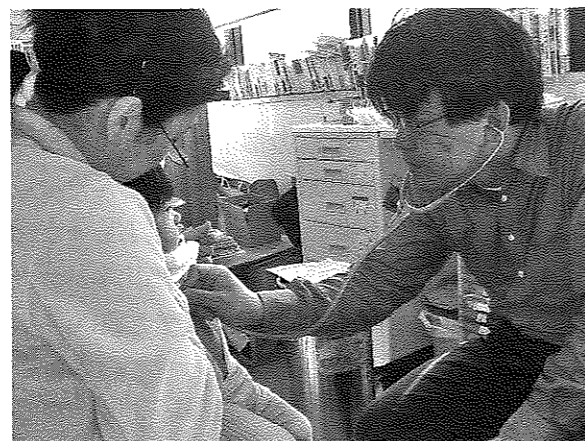
育所併設型)と非施設型がある。しかし、病児保育を扱う保育所は保育所全体の2%程度と、決して多くはない。これに対して、フローレンスの病児保育は保育スタッフが利用者の自宅などへ行って子供の面倒をみる「非施設型」を事業化した。子供の年齢や利用実態に応じて5000円から2万円の月会費で運営をまかなう「共済型」が特徴だ。子供が熱を出したりした場合、フローレンス本部に前日までに電子メールで予約するか、当日の朝に電話で依頼すると、保育スタッフが会員宅に行き、子供をかかりつけの小児科で受診させ、会員の自宅やスタッフの自宅で面倒をみる。病児保育が必要となった日の朝8時までに予約すれば、100%対応が可能としている。

05年4月に東京都中央区と江東区でスタート。保育スタッフは30人、利用会員は約450世帯だ。子供の年齢は主にゼロ歳から3歳という。

■ひとり親家庭への支援強化

08年7月からはゴールドマン・サックス証券からの寄付をもとに、所得の少ないひとり親の20世帯を対象に、月会費が1050円の低料金サービスも始めた。実際に子供を預ける際の費用は、毎月初回は無料で2回目以降は1時間あたり1050円かかるが、一般の会員よりは負担が少ない。

ひとり親家庭の数は離婚などを理由に増えているが、ひとり親の場合、子供が病気になった時の経済的負担のほか、会社を休むことが多くなりがちで、雇用主の信頼を得にくくなるというリスクを抱えている。企業からの単発的な寄付では継



体調の悪い子供は医師が診察する

続的な支援が難しいと考え、08年11月からは寄付会員(サポート隊員)も募集している。12月中旬時点で隊員数は26人。隊員の月額負担額は1050円、2100円、8400円の3段階だ。

❖ NPO昭和 ❖
自治体と大学が連携

東京都世田谷区の三軒茶屋駅に近い昭和女子大学の施設で、ゼロ歳から2歳くらいまでの子供が遊具やすべり台で母親と楽しそうに遊んでいる。ここは同大学オープンカレッジ2階にある「おでかけひろばSHIP」、地域の親子が集う場所だ。昭和女子大が母体となって05年に設立したNPO法人「NPO昭和」(東京・世田谷、08年11月にNPO昭和チャイルド&ファミリーセンターから名称変更)が世田谷区から受託運営している。

■「ひろば」では母親同士が友達に

ここから徒歩15分のところに住む主婦は「9か月になる子供を連れて毎日来ています。お母さん同士が友達になってランチに行ったりもするし、子育ての情報も得られます」とうれしそうだ。ひろばを担当する松崎恭子さんは「ミルクを飲んでくれないのですがどうすればいいのかわからない」といった食事の相談が多いですね」と話す。栄養士など専門家もいるので、様々な相談に対応できる。

このNPO法人の設立趣意書で坂東真理子学長(NPO昭和理事長)は「子育てに関して地域の人々が交流できる場が求められている」と地域や学校の役割の重要性を強調した。今回の大賞選考では、大学の有形無形の財産を生かし地域の子育て支援に貢献するという大学の新たな役割を開拓した点が評価された。

NPO昭和の取り組みの柱は、東京都認証保育所「昭和ナースリー」の運営のほか、世田谷区と連携して行っている「おでかけひろばSHIP」、一時預かり保育「ほっとステイ SHIP DAY NURSERY」の運営だ。

■「発達相談」の窓口機能も併設

まず保育所だが、05年11月、同大学第一校宅跡を利用して定員30人で開設。08年4月にはオー



おでかけひろばSHIPでは親子が楽しそうに遊ぶ

ブンカレッジ1階にも新たなスペースを設け、専業主婦家庭も対象にした認定こども園も兼ねて定員も66人に増やした。ゼロ歳から就学前児童までの保育と幼児教育を一元化した施設だ。

ひろばは世田谷区の受託事業として05年12月に「子育てルームSHIP」という名称でスタート。07年12月には、1つの建物で多機能な子育て支援を行う世田谷区の施策「子育てステーション世田谷」の受託事業に移行し、「おでかけひろば」になった。子育てルームのときは土日が休みだったが、ひろばは年末年始の6日間以外は開いており、無料で利用できる。08年11月時点で、登録者数は3765人、1年間の利用者数は約5万人にもなった。発達相談の窓口機能も併設している。

ほっとステイは理由を問わずに一時的に子どもを預かる。歯科医や美容院に行くときだけでなく、復職に備えてパソコン教室に通うなど勉強のために子供を預ける人もいる。定員は10人。08年11月時点の登録者は661人、利用者は1753人。

■学生にとっては実習の場

これらの施設で活躍しているのは昭和女子大の学生だ。特に月1回開くひろばでのお誕生会では学生が主体で人形劇などをやる。学生にとっては実践的な学びの場になっている。「学生の意識を変える意味でも役立っている。子供たちに何ができるのか考えるようになり、向上心も出てくる」と昭和女子大総務部の比嘉秀之さんは話す。

(地方部次長 滝沢 英人、小島 基秀)